

テクネ・マクラ「芸術は永し」

TEXNH MAKPA

女子美術大学歴史資料室ニュースレター

第 7 号



私立女子美術学校刺繍科授業風景 大正4年（1915）頃

特別寄稿

女子美術大学と刺繍教育

大崎 綾子

女子美術大学の刺繍教育は明治33年（1900）本学創立翌年の開校時より現代まで伝えられている。

明治時代、それまで技芸として伝えられていた刺繍は女子教育の中に取り入れられ、女子師範、各女学校では本校に先立って刺繍教育が行われていた【注1】。

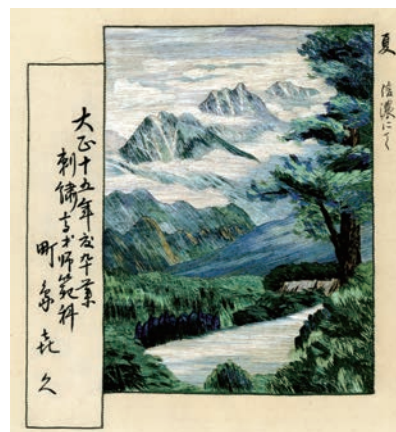
女子美術大学の前身である女子美術学校は「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」を建学の精神に掲げており、刺繍科の卒業生は教員になることが多かった。大正4年（1915）には文部省より刺繍科と造花科の高等師範科卒業生に手芸科中等教員無試験検定資格【注2】が付与されていることから学校側の積極的な働きかけと共に卒業生の実績が評価されたものと考えられる。

設立時の刺繍科の教員、鶴田直子【写真1】は明治26年（1893）シカゴ・コロンブス万国博覧会に刺繍を出展、明治28年（1895）京都で開催された第4回内国博覧会に《刺繍能楽石橋図襷紗》を出品し褒状を授与された。

明治33年（1900）パリ万国博覧会に刺繍衝立などを出品し褒状を授与され、明治33年（1900）パリ万国博覧など精力的な活動を行っていた。鶴田の指導の下、大正3年（1914）上野公園で開催された東京大正博覧会に生徒作品を出品、私立女子美術学校は銀牌・賞状を受けた。また、大正4年（1915）アメリカ・サンフランシスコで開催されたパナマ運河開通記念の万国博覧会の際には、文部省より補助金が下され生徒作品を教育部門に出展し、学校として金牌・賞状を受賞した【写真2】。刺繍科からは当時、輸出品として注目を集めていた緻密で絵画的な刺繍を数点出展した。

鶴田の後を継いで刺繍科をひきいたのは明治41年（1908）刺繍科撰科普通科卒、明治43年（1910）刺繍科撰科高等科卒の松岡フユ（冬子とも表記）【写真3、4】であった。

松岡は在学中の明治40年（1907）に東京勸業博覧会に出品、二等銀牌を授与されている。お孫さんの松岡哲さんによれば、松岡は明治12年（1879）生まれ、医師であった夫を早く



【写真5】大正15年（1926）学生作品



【写真1】鶴田直子先生



【写真2】出展作品を制作する生徒達
左端は鶴田直子先生



【写真3】松岡フユ先生



【写真4】刺繍科撰科高等科卒業証書



【写真6】昭和9年頃の学生と刺繍作品
左端が松岡先生



【写真7】松岡先生制作『種類縫』



【写真8】昭和54年（1979）講評会
左が田沢先生

に亡くし27歳で私立女子美術学校に入学し刺繍を学んだ。

現在、大学には明治40年（1907）からの学生の貴重な作品が遺されている。一説には卒業試験として一日で一枚の色紙大の作品を仕上げたという。国内外を見渡しても、刺繍作品は戦災で焼失してしまったものが多く、本校に遺された刺繍作品は当時の刺繍を知る上で貴重な資料となっている【写真5】。

明治維新以降、刺繍を含む染織品は美術工芸品として国内外で隆盛を極めた。そのような時代背景の中で女子美の刺繍教育は当時貿易の主流であった絵画的な刺繍を研究し、画図では毛筆画・鉛筆画・用器画（図学）、染色理論・実習の授業を設けて下絵から自ら制作し、当時の工人が分業で行っていた下絵制作から刺繍を1人で行える人材を育成した【写真6】。

松岡は刺繍の繡法の研究を始め、当初15種類余りの基礎的な繡し方を大正7年（1918）には36～7種、翌年には60種と創案していった。最終的には120種余りの繡法を『種類縫』【写真7】としてまとめた。この繡

法は現在の大学の刺繍教育にも生かされ、女子美で刺繍を学ぶ者はその一端を習得することが出来る。

戦争の影響で、材料である糸の入手が困難になったため、昭和22年（1947）の卒業生をもって刺繍科は生徒募集を停止した。その後、昭和38年（1963）に再開するまでは被服科・服飾科の選択科目として松岡の指導の下、存続していた。刺繍科の復活の背景には当時の欧風刺繍の流行に伴い刺繍教育を求める声や、同窓会の熱心な働きかけがあった。指導は蜂谷伊恵、次いで田沢澄江があたった。田沢澄江は卒業後、京都の刺繍師で帝展作家でもある箸尾清に弟子入りし、染織繡を融合した新しい時代の刺繍を学び、刺繍教育に取り入れた。

平成に入り清水正子を中心とした教師陣が指導を行い、国内外の公募展へ発表を積極的に行うようになった。平成12年（2000）からは岡田宣世が指導を行っている。岡田は欧米の現代刺繍作家との交流を通じてマシン刺繍を取り入れ、また刺繍の技術を生かした染織文化財の

保存修復というジャンルにも取り組んでいる。

刺繍教育は現在4年制大学のデザイン・工芸学科の工芸専攻のテキスタイルコース刺繍で行われており、平成26年（2014）3月には4年制大学になってはじめての卒業生を送り出した。創立当初からの伝統的な刺繡から女子美の特徴でもある創作的な刺繡まで広く学び制作を行っている。

注

1. 女子師範学校（東京）は明治7年（1874）に設立、明治32年（1899）に技芸科が新設され刺繡科目が設けられていた。他には実践女学校、共立女子職業学校等で刺繡が学科として設置されていた。
2. 明治17年（1884）より昭和23年（1948）まで行われていた中等教員免許の検定試験で、女子美の場合、卒業をもって無試験で中等教員免許が付与された。

写真

1～3、6、8

女子美術大学歴史資料室所蔵

4、5～7

松岡家寄贈資料 芸術学部デザイン・工芸学科所蔵

（芸術学部 デザイン・工芸学科 非常勤講師）

取材レポート

大柳久栄氏インタビュー

～一枚の紙にまつわるエピソード～

【インタビュー・文】 原 聖、高橋 直子

今回のインタビューは、本学卒業生で料紙研究家の大柳久栄氏が一枚の紙をご寄贈くださった事がきっかけとなり実現しました。大柳氏に学生時代・卒業後、寄贈資料、作品修復活動について語っていただきました。

■学生時代・卒業後について

学生時代のお話からお聞かせください。

大柳久栄氏（以下省略）：

芸術学部図案科に学びました。創立60周年を迎えた頃です。当時、図案科の学生でも人体解剖学、図学、日本画、洋画、版画、彫塑など様々な事を学びました。図案科の乗松巖先生には「何でもできるようにになりなさい」と教わりました。3年生の時、乗松先生が1年間ギリシャに研修に行かれる事となり、私たち乗松教室（以下Cubと表記）の4名の学生は、与えられた課題をどのように理解し取り組むかの検討から始めました。この時自分で考え抜いて課題を完成させたことがその後の糧になったように思います。また、この頃、Cubでは長野隆業先生の指導で「数学と図形」というテーマに取り組んでいました。その活動は『DESIGN』第15号（1960年12月）などに取り上げられるなど注目されました。また、「科学の目・線

と数」と題した、NHK教育テレビ高校講座の番組に放映されたことがあります。当時のガリ版刷りの台本が残っていました【写真1、2】。

在学中に先生の紹介でアルバイトをされたとか。

乗松先生や長野先生の紹介でデザインのアルバイトをしました。例えば、東京放送（TBS）のQSLカード（通称ベリカード）のデザインの仕事。当時、採用されたものが手元にあります【写真3】。壁画制作の依頼を受けたこともあります。60年安保の時代でデモ行進を横目に、依頼された仕事を締め切り向けて必死で取り組んだことを覚えています。

卒業後の進路は。

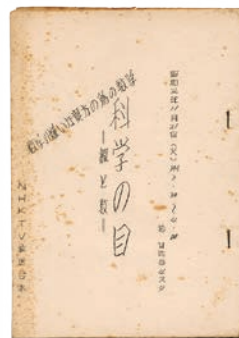
服部時計店（現セイコーホールディングス株式会社）に就職しました。ここで「ディズニータム」など時計のプロデュースやデザインを行いました。当時、女性は25歳定年といわれ、やむを得ず退職しました。

その後、女子美の図案科助手になりました。次のお話につながる事ですが、この時、工芸科教授として染織家・柳悦孝先生（元学長）が、美術学科教授として日本画家・片岡球子先生が在職されていました。



大柳 久栄（おおよなぎ ひさえ）

料紙研究家・文溪堂工房主宰。昭和37年（1962）年女子美術大学芸術学部図案科卒業。昭和41年（1966）図案科助手。元女子美術大学講師。公益財団法人河鍋曉斎記念美術館評議員。平成23年（2011）、日本博物館協会顕彰2号受賞。



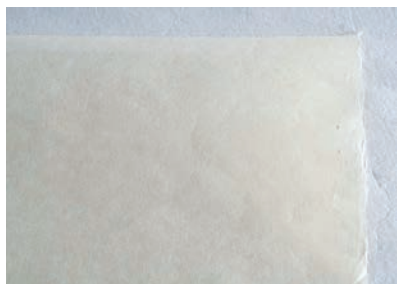
【写真1】「科学の目一線と数一」
（NHK教育テレビ高校講座）台本



【写真2】番組の一場面。制作する大柳氏



【写真3】東京放送（TBS）QSLカード



【写真4】膏葉紙
柳悦孝先生お気に入りの紙

■寄贈資料について

今回歴史資料室にご寄贈いただいた紙にまつわるエピソードをお聞かせください。

これは膏葉紙です【写真4】。現在の湿布の役割をしたもので、昔、けがをした時など軟膏とともに患部に貼って使っていました。柳先生によると、戦後、布の入手が難しかった時代に染織家たちは水に強いこの紙を使って型染めをしたそうです。次第に膏葉が廃れ、紙の需要が無くなり、紙漉きの技術が途絶えることを心配して女子美の他の先生方にも購入を薦めていました。片岡球子先生もお声をかけられたお一人でした。先生はこの紙を揉紙【写真5】にしてから、パネルに貼って使われたと思います【写真6】。「紙がすんなりいかないで抵抗するのがいい。ねじ伏せるように格闘するのがよい」と言っていたそうです。先生の作品の中で、皺目の見える紙の作品はこの種の紙を使用しているのではないのでしょうか。

この紙自体は女子美の元職員・田中愛子先生が片岡先生に個人的に日本画の指導を受けていた際、「使ってみなさい」と渡されたものです。その20年後、私に渡されました。これらのエピソードも含めて保存・活用してほしいと思い、今回寄贈しました。



【写真5】膏葉紙 揉み加工
片岡球子先生が制作のために加工させた紙

■作品修復活動について

平成23年(2011)、日本博物館協会顕彰2号を受賞されましたが、受賞の経緯は。

昭和52年(1977)、河鍋暁斎記念美術館が開館した時、同館を訪ねました。その時、破れしわくちやになった暁斎の下絵を見て、暁斎の筆力の凄さに魅せられ、「暁斎の絵をもっと見たい」と思ったのが修復をはじめのきっかけとなりました。それから30年以上、同館所蔵品の下絵修復を行ってきました。受賞はこの活動に対して与えられたと聞いています。はじめ、未修理の下絵や画稿がほとんどで、その時は1,000点ほどと聞いていました。今年37年目に入りましたが、まだ終わっていません。

墨で描く日本画作品は修正する際、上から紙を貼って描きますが、長い年月を経ると、糊の粘着性がなくなり、剥がれてきます。暁斎の下絵・画稿類はこの状態になり、修復はまさにジグソーパズルを合わせていくような作業でした。暁斎が描きあげたときの状態にまで修復をして多くの人にこのすばらしさを感じてほしいと思い、本格的な修復の技術を学ぶため、永井信一先生(本学名誉教授)のご紹介により東京文化財研究所にて指導を受けました。

平成5年(1993)12月から翌



【写真6】揉み加工した膏葉紙を裏打ち加工した紙。この後パネルに貼って使用

年2月に大英博物館(ロンドン)で河鍋暁斎の展覧会が開かれ、下絵・画稿が多く出品されました。この展覧会にはヨーロッパ各地から多くの方が訪れ、大好評となりました。また、下絵・画稿の存在により、本画の発見や真贋の判定に役立ったこともありました。後世に恥じない修復をしたいと思い、取り組んでいます。

また、同館との関わりの中で、暁斎の弟子・島田友春や暁斎の娘・河鍋暁翠が私立女子美術学校の日本画教員であることを知りました。当時、女子美でもあまり知られていなかった2人について調査し、論文にまとめてきました。

その他、書写用料紙制作、建築空間のための創作、本の装丁・装画、打ち紙の研究をしてきました。今より、女性が働き続けることに対して社会的理解は少なかったと思います。そんな中で、興味を持ったものは、専門外でも挑戦してみよう心掛けてきました。そしてそれぞれ分野で納得するまで突き詰めて取り組む。これまでずっと女子美在学中に学んだ「何でもやってみる」という精神を持ち続けてきたように思います。

インタビューは2014年1月23日、大柳久栄氏工房にて行いました。

原 聖(歴史資料室室長/芸術学部教授)
高橋 直子(歴史資料室学芸員)

「横井玉子・藤田文蔵と私立女子美術学校創立展」開催

高橋 直子

女子美術大学歴史資料展示室では、現在、「横井玉子・藤田文蔵と私立女子美術学校創立展」を開催しています（2014年4月4日～7月21日）。本学は、明治33年（1900）、私立女子美術学校として創立。114年の歴史を持っています。本展では創立を成し遂げた横井玉子（1854-1903）・藤田文蔵（1861-1934）の生涯と功績を作品・資料やパネルにより解説しています。ここでは展示資料を交えながら2人の略歴を紹介します。

横井玉子は嘉永7年（1854）熊本^{しん}の支藩である肥後新田藩家老・原尹胤（これたね または まきたね）の次女として江戸築地（現東京都中央区）に生まれます。原家は明治元年（1868）肥後高瀬町（現熊本県玉名市）に移住。玉子は19歳で、幕末の思想家横井小楠の甥・左平太と結婚します。左平太は慶応2年（1866）から明治8年（1875）の間に2度アメリカへ留学します。本展では明治6年（1873）に左平太がワシントンから玉子らに送った書簡をパネルにて紹介しています。

左平太は帰国後、肺病を患い回復しないまま亡くなります。玉子22歳の時でした。その後、玉子は上京した叔母・横井つせ子とともに暮らします。裁縫や女礼式の教員資格を取得し、教員という職

を得て自立した女性として歩み始めます。ミッションスクールである新栄女学校^{しん さかえ}の教員・事務監督を務め、他校と合併し女子学院となった後も教員・寄宿舎監を務めました。玉子は洋画家の浅井忠や本多錦吉郎に水彩画や洋画を学んだとされており、洋画家の黒田清輝とも交流しました。現在展示中の著書『家庭料理法』にはレシピとともに彼女の絵画作品の写真が掲載されており、その実力を見ることができます。また、玉子はキリスト教徒となり、東京婦人矯風会（現日本キリスト教婦人矯風会）の中心メンバーとなります。国会請願や女子慈愛館設立を通じて女性の地位向上や自活を目指して活動しました。機関誌『婦人新報』には料理のレシピや当時の女子に相応しい「女子改良服」案を発表しました。本展では、改良服デザイン画（パネル）と本学教員により復元制作された改良服を展示しています。

藤田文蔵は文久元年（1861）、池田家の漢学者・田中幾之進^{いくのしん}の3男として因幡国邑美郡湯所村（現鳥取県鳥取市）に生まれます。14歳で上京し、その後、日本初の官立の美術学校である工部美術学校彫刻学科にて洋風彫刻（塑造）を学びます。同校在学中に、牛込^{きん}基督教会を設立した藤田盡吾^{じんご}の養子となります。文蔵はキリスト教

徒となり、後に日曜学校教師や長老を務めます。卒業後は彫刻家として制作活動をするとともに東京美術学校（現東京藝術大学）において後進を指導します。本展には、平成24年（2012）に本学に寄贈された藤田文蔵作品より5点を出品。多くの肖像彫刻を手掛けた藤田が制作した《ベートーベン胸像》やキリストの石膏レリーフ《イコン》などを展示しています。

私立女子美術学校開校後は、横井玉子が舎監兼監事を、藤田文蔵が初代校長を務めます。経営危機に見舞われた後は、佐藤志津（初代校主・第二代校長）に経営を委ねることになりますが、この頃、玉子は胃癌が悪化し、明治36年（1903）に亡くなります。一方、文蔵は本学を退職し制作活動やキリスト教伝道に情熱を傾けました。開校後、玉子・文蔵が本学に携わったのはわずかな期間ではありましたが、官立の美術学校・東京美術学校が女子の入学を認めた当時の状況を考慮すれば、本学創立を成し遂げた2人は女子高等美術教育に大きな功績を残したといえるでしょう。本展が横井玉子と藤田文蔵の歩みと本学の礎を築いた2人の功績を伝える機会となれば幸いです。

※人物の年齢は数え年を表記。

（歴史資料室学芸員）

歴史資料室日誌 2013年10月～2014年4月

10月

○本学と学術交流協定を結ぶ広州美術学院（中国・広州）教授陣が展示室を見学。



見学の様子

○本学と学術交流協定を結ぶ誠信女子大学校（韓国・ソウル）総長・教授陣が展示室を見学。



見学の様子

1月

○相模原キャンパス2号館1階ロビーにてパネル展「佐藤志津と私立女子美術学校再興展」開催（1月22日～5月17日）



展示風景



展示風景

3月

○佐倉市教育委員会主催により佐倉市立臼井地区公民館にてパネル展「佐藤志津と私立女子美術学校再興展」開催（3月4日～9日）。パネル提供及び講演会講師派遣協力。



展示会場

○女子美術大学歴史資料展示室にて展覧会「平成25年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み～私立女子美術学校開校時に設置された学科を中心に～」終了。



展示会場

4月

○女子美術大学歴史資料展示室にて展覧会「横井玉子・藤田文蔵と私立女子美術学校創立展」を開催（4月4日～7月21日）。本誌4ページ参照。



展示風景

○平成26年度合同入学式開催。会場である中野サンプラザロビーに学校史パネルを展示。



展示風景

○新1年生が受講する基礎学習ゼミ自校史教育を担当（～5月）

寄贈報告 2013年10月～2014年4月

作品・資料をご寄贈いただいた方の御名前を記し、感謝の意を表します。(寄贈順)

- 永田みどり氏 刺繍作品等 55件
- 浦川登久恵氏 羅蕙錫関係資料 2件
- 入江 観氏 「女子美術専門学校 美術工芸学院」パンフレット 1件
- 柳 悦州氏 ネクタイ織機 1件
- 佐藤善一氏 横井玉子関係資料、藤田文蔵写真 38件
- 茅根静子氏 写真 2件
- 学校法人女子学院 横井玉子写真、矢島せい子他著『家事と雑用』、山沢栄子著『私の現代』3件

- 大柳久栄氏 (公社)河鍋暁斎記念美術館『特別展河鍋暁斎の能・狂言画』、柳悦孝関係資料 4件
- 吉井富士子氏 加藤成之著『みもどの花』 1冊
- 青木純子氏 滝沢達也資料 3件
- 宮尾文榮氏 『現代和紙見本帖』その一 1冊
- 宮越洋子氏 『何香凝画集』 1冊
- 高田幸子氏 簪 1件
- 田邊麗子氏 田邊氏作成図面等 22件
- 瀬戸一美氏 簪迫等 4件
- 岩田嘉之氏 芹沢銈介関係資料等 14件
- 金沢湯涌夢二館 坂原富美代著『「彦乃日記」を読みながら 笠井彦乃と夢二』 1冊

歴史資料整備委員会委員交代のお知らせ

平成25年(2014)12月17日付けで以下の通り歴史資料整備委員会委員が交代いたしましたのでお知らせいたします。

前委員 見城 美子(外部嘱託委員)

新委員 松崎 笙子(外部嘱託委員)

歴史資料ご寄贈のお願い

女子美術大学歴史資料室では本学の学校史・教育内容を伝える歴史資料の収集を行っております。特に創立期から戦前期の資料を収集・調査しております。当時の写真、教材、課題作品等をお持ちでご寄贈いただける方は、本学歴史資料室までご連絡ください。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

表紙写真

私立女子美術学校刺繍科授業風景

大正4年(1915)頃

本学刺繍科授業風景。中央奥に立つ人物が初代刺繍科教員の鶴田直子。本誌2～3頁掲載「女子美術大学と刺繍教育」にて大崎綾子氏が解説する通り、刺繍科は明治34年(1901)本学開校時に設置。本学の刺繍教育は現在に至るまで続いている。この写真が写された時期、鶴田の指導のもと他学科とともにアメリカ・サンフランシスコ万国博覧会に出品し、金牌・賞状を授与された。

TEXNH MAKPA 第7号

テクネ・マクラ 「芸術は永し」

女子美術大学歴史資料室ニューズレター

発行日：2014年6月13日

編集・発行：女子美術大学歴史資料室

デザイン担当：竹田奈那子

制作・印刷：株式会社 日相印刷

〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8 女子美術大学1号館1階

TEL：03-5340-4658 FAX：03-5340-4683

E-mail：heritage@venus.joshibi.jp

URL：http://www.joshibi.net/history/



女子美術大学